

居住形態の変容に適合して継続的な居住を実現するための試み —京都の路地空間における住居増改築計画を通じて—

A trial to realize the continuous living which adapt to the life style change
- from the project of enlarging and rebuilding the house beside "Roji" in Kyoto -

10423006 竹内光子
主査 篠原聡子助教授
副査 後藤久教授
小谷部育子教授

居住形態、継続的居住、住宅、増改築、高齢者
life style, continuous living, house, enlarging and rebuilding, the aged

第1章 研究の目的と背景

1.1 研究の目的

バブル期のスクラップ・アンド・ビルドへの反省、伝統や郷愁の見直し、省エネルギー、都心回帰など、さまざまな事柄が重なり、近年、建築物のリノベーション、コンバージョン、リフォーム、などが一般的にも受け入れられようとしている。生活の舞台であり、人が毎日過ごす場所である『住宅』に関しては、テレビ番組の影響もあり、人々は特に関心をもち、自らも取り組もうとする。

総務省が発表した統計データによると、増改築した持ち家の数は年々増加している。増改築場所別に見ると、台所、便所、浴室の増改築の割合で増加が見られ、さらに持ち家の家計主の年齢別に見ると、「65～74歳」及び「75歳以上」で割合が高くなっている。一方、居室の増改築においては「25～29歳」の若い世代に多く見られる。日本の高齢化はさらに進む傾向にあり、そうした高齢者が自分の住んできた持ち家で生活し続けるために増改築をしているということが、近年の増改築の増加傾向のひとつの理由であると考えられる。

このような高齢者のための増改築の内容で主なものは『住宅の設備に関わる増改築』である。しかし、『住宅』の増改築は『住宅の設備に関わる増改築』に終始していいのだろうか。『居住者』が年を重ねるに伴い、そこには世帯員の増減、生活スタイルの変化など、居住形態の変容があったはずである。『住宅の設備に関わる増改築』は住宅の老朽化や、居住者の身体的能力低下に対応するための増改築である。もちろん、これらも住み続けるためには欠かせない要素である。

しかしそれに加えて、継続的な環境の中で心身ともに快適に住み続けるためにはどのような住宅が望まれるのだろうか。住まいにはどのような形が考えられるのだろうか。

本論文では、京都の路地空間における住居増改築計画を通じて、現在の居住者N夫妻のこれまでの居住形態の変容を整理し、今後どのような住み方が実現できるのかを、考察の過程を含め整理し、それを実現するための試みを提案する。

1.2 研究に至るまでの経緯

N夫妻は数年前から空き家となっていた隣地を購入し、この土地に書庫・書斎・ゲストルームとなるような建築物の建設と、現在住んでいる住宅の老朽化対策と高齢者対応への改修を希望した。篠原聡子助教授に設計を依頼、私の研究対象として調査をすると共に修士制作として設計に取り組むこととなった。

1.3 論文の構成

本論文は、5つの章からなる。

第1章は序論であり、本論文の背景と目的を示す。

第2章から第5章は本論である。

第2章では、役所や京都府立総合資料館で集めてきた資料、敷地調査・実測調査から得たデータ、またN夫妻からのヒアリングをまとめ、N邸の現状について述べる。第3章では、N夫妻が結婚して浄土寺の長屋に入居してから現在までの居住者の変化と居住空間の変化のまとめと分析を行う。第4章では、第2章・第3章の調査・分析から浄土寺の長屋の問題点と改善点を浮かび上がらせ、それに対してどのような提案を行うかをまとめる。

第5章では、実施設計にいたるまでの経緯を打ち合わせの記録としてまとめた。

第6章は結論である。

最終的に提案する平面図、立面図、断面図、展開図、模型写真をもって結論とし、修士制作における考察のまとめを行う。

第2章 N邸の現状

2.1 敷地調査

N邸は、京都駅から5.8km程東北、バスで20分程度の場所に位置し、大通りから一本道を入り、さらに路地を進んだ突き当たりにある(写真1)。

増築予定地の裏側は駐車場になっており、その隣には3階建てのマンションが建っている。このマンションは現在住民退去が進められており、1月下旬より解体される(写真2)。

路地には5件の住宅が接している。現在N夫妻が居住している家と隣家は2戸1の住宅で、現在隣家には高齢の女性が居住している(写真3)。新築する土地ももとは2戸1の形体をとっていたが、隣家が先に建て替えを行ったため、現在隣家とは壁・屋根・塀などは接続していない(写真4)。

かつて路地は周辺住民の情報交換の場であり、子供の遊び場であり、と積極的に活用されていたが、現在は周囲の住民の高齢化が進み、空家も増え、治安の悪化や、道幅の狭さにより救急の際に車が入れない、などの問題を抱えている。



写真1
路地の入口より
つきあたりの住宅がN邸

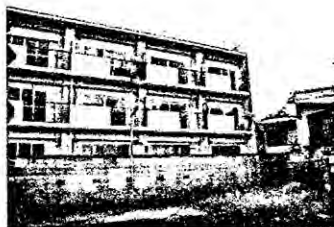


写真2
駐車場裏に建つアパート



写真3
隣家との接続部分
屋根の途中から隣家である



写真4
駐車場より
N邸(左)と増改築予定地に建つ
住宅(右)

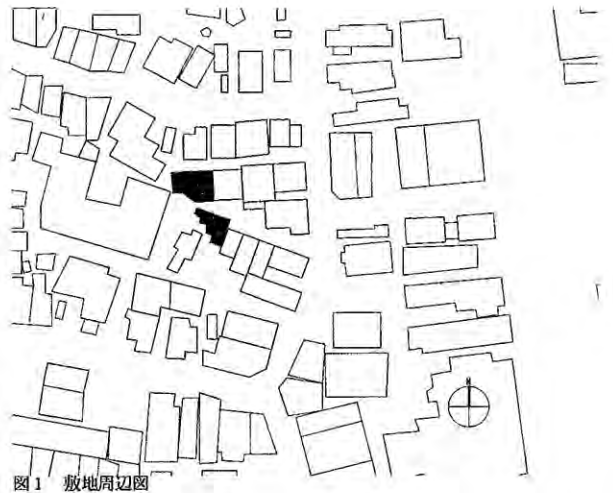


図1 敷地周辺図

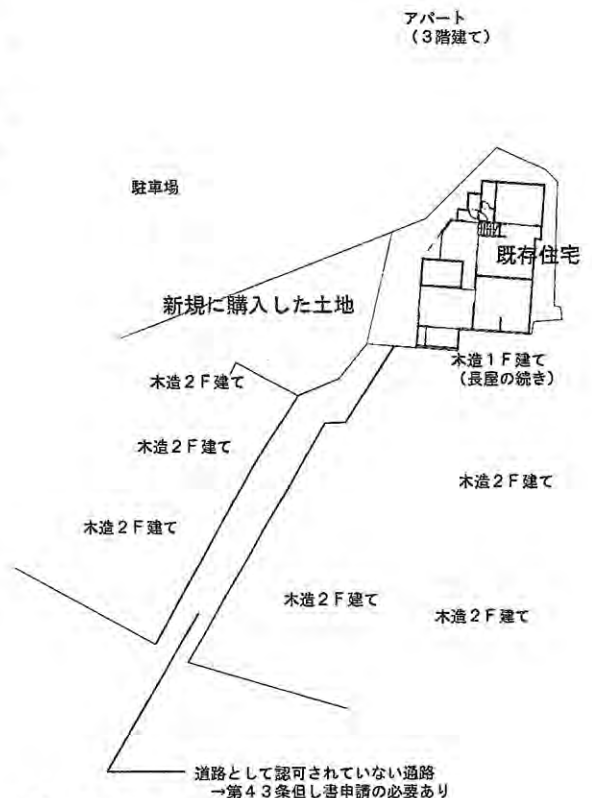


図2 敷地周辺図

- ・第一種低層住居専用地域
- ・建蔽率 60%
- ・容積率 100%
- ・準防火地域
- ・10m高度地区
- ・美観地区第3種地域
- ・第一種地域
- ・法43条道路(前面道路について)
- ・敷地面積 既存部分 139.36㎡
新築部分 96.97㎡

2.2 実測調査

2005年4月10日、8月28、29日の2回にわたり、N夫妻が現在生活している住宅で実測調査を行った。実測調査とN邸に保管されていた改修時の図面をもとに平面図・立面図・展開図を作成する(図3・図4)。

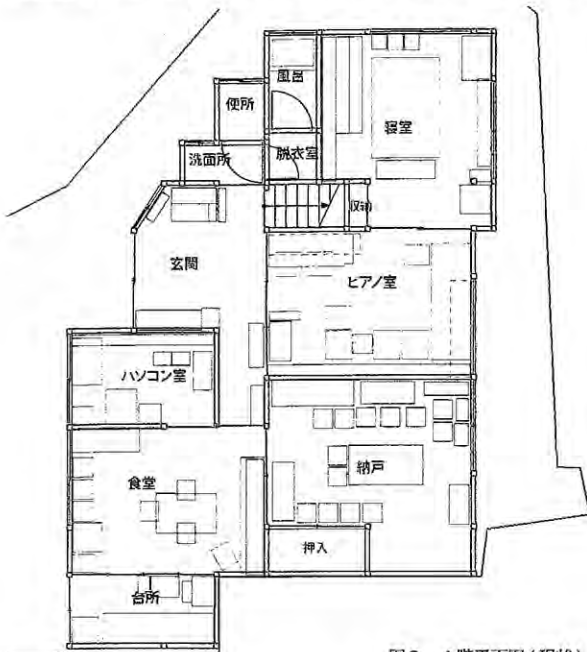


図3 1階平面図(現状)

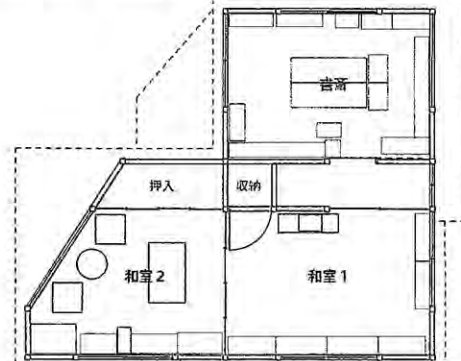


図4 2階平面図(現状)



左:写真5 ピアノ室
右:写真6 2階書斎

どの部屋にも本棚が置かれ、本がたくさん収納してある。

2.3 N夫妻からの要望

2005年3月6日N邸訪問時に、N夫妻から提示された要望をまとめる。

第3章 居住者の変化と居住空間の変化

3.1 N夫妻における家族の変化と居住空間の変化

1963年のN夫妻の浄土寺の長屋への入居から現在に至るまでの家族の変化と居住空間の変化を、N夫妻からのヒアリングをもとに家族関係図と間取図にまとめる。

3.2 分析

居住空間を次にあげる5つの空間に分類し、分析を行う(図5)。

3.2.1 private空間の個別化と拡大

private空間の個別化は2段階で見られる。

1回目は、子供が成長する過程において、子供たちの個人的な活動が親の部屋から子供部屋に移行し、さらに2人の子供がそれぞれ個人コーナーを持つようになる(図6)。

2回目は、数回にわたる増築において。増築により、夫妻ともにこれまで居室のコーナーであった書斎がそれぞれの部屋として独立する(図7)。

その後、書籍がさらに増加し、夫は近くにマンションを購入した。private空間が個別化し、1人あたり1空間が実現されると、次の段階としてその拡大が求められる。

今回の増改築では、所有する書籍のさらなる増加によって作業スペース、収納スペースが手狭になった夫妻に、それぞれ十分な空間を確保することが求められる。

- private: 各個人が個人的な活動をする空間
- N夫妻世帯(N夫妻、長女、長男)
親世帯(夫の両親)
- closed common: 居住者の共用空間
- open common: 開かれた共用空間
- stock room: 書籍や衣類などの収納として使われている空間

図5 空間の分類 凡例

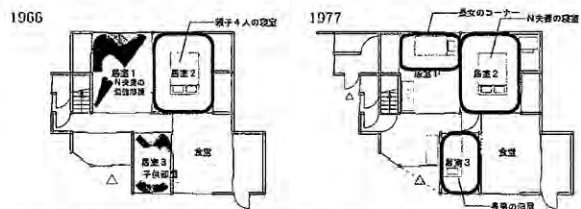


図6 子供の成長に伴う private空間の個別化

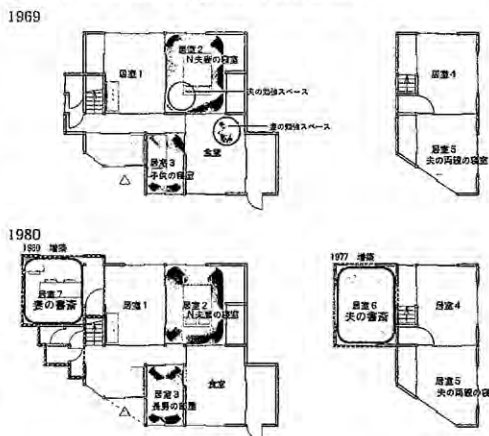


図7 増築による private空間の個別化と拡大

3.2.2 open common の減少

子供が小さく夫の両親と同居を初めてから数年は open common 空間は N 夫妻の勉強部屋との共用である。また、長女に個室を与えようとした時に、活用したのは客間として利用していた居室 1 である。(図 8)

空間が不足したときに利用する居室として open common 空間が充てられる傾向が見られる。

また、2005 年以降は 2 階に 2 間の客室が設けられている。現在も空間は不足しているが、それ以上に客間を設ける必要性が出てきたのである。この点については、次の項で述べる。

3.2.3 closed common の発生と

open common の性質の変化

1963 年頃の open common 空間は N 夫妻の友人が集まる部屋や食堂だった。その後、1967 年頃の open common 空間は子供の習い事や家庭教師の場や客間という位置付けとなる。

前者は、共に食事もし、大半の時間を浄土寺の長屋で過ごす人々が入り出る空間であり、後者は、定期的あるいは一時的に訪れる人に対するものである。

N 夫妻の学業修了と両親との同居を機に浄土寺の長屋には closed common が発生した。浄土寺の長屋では、食を中心とした common が形成されている。この点を考慮すると、前者の open common は食を共有し、時には子供の世話もしており、closed common に近い性質をもつものだったと考えられる。

子供の乳幼児期には個人的な活動も親子が一緒に行う。そのため、この時期は closed common という空間が定義しにくい。そのような時期には、closed common に代わるものとして open common が位置付けられることもある。

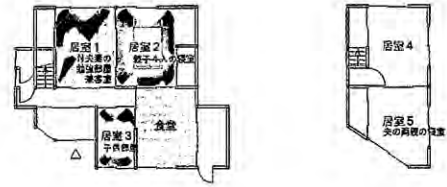
1990 年ごろには、再び食堂が open common 空間となる。これは、夫の両親の介護のために学生アルバイトや介護ヘルパーが来ていたことによる。活動内容としては、話し相手や食事の補助をはじめ、介護ヘルパーによる身体介助があげられる。

現在は 2 階の居室 4・5 が open common 空間となっている。長女が帰省したときにはこの部屋に泊まり、他にも来客があった時にはこれらの部屋に通ず(図 9・図 10)。

今後、外部からのサポートの必要性はさらに増し、今まで N 夫妻から出向いていた用事を相手を招いて済ますことも増える。また、N 夫妻は来客と過ごす時間を大切にしようと考えている。

今回の増改築によって新たにつくられる居住空間には、これらのニーズに対応するような open common 空間が求められている。

1966



1977

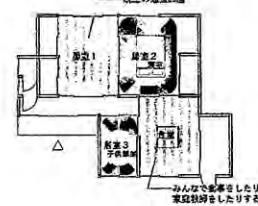


図 8 1966 年と 1977 年における open common 空間の比較

	closed common	open common
1963	—	N 夫妻の友人 (勉強・食事を共にする)
1969	N 夫妻世帯 / 親世帯 (食事を共にする)	ピアノの先生 / 家庭教師 (子供の指導)
1990	—	学生アルバイト / 介護ヘルパー (夫の両親の介護)
2005	—	長女 / 学生アルバイト (帰省 / 家事等の手伝い)

図 9 closed common と open common の使用者、川途の比較

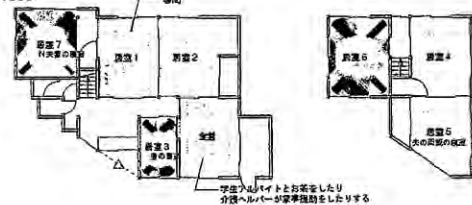
1963



1969



1990



2005

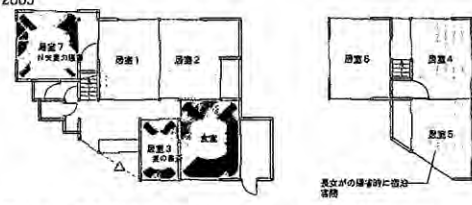


図 10 各年代における open common の使われ方

3.2.4 アクセスしやすい open common 空間

open common 空間には、主に居室1が充てられていた。2005年以降は2階の居室4・5が充てられており、これらはともに玄関からすぐ、あるいは玄関の目の前にある階段を上ってすぐの居室である。

open common のように、不特定の間人が出入りする空間は、private 空間を通らずに、できるだけ入口に近く出入りしやすい場所が適している。(図11)

3.2.5 stock room の増加

時間の経過に伴って、stock room が増加している。これは、子供の独立や両親の他界によって、それまで private 空間として使用されていた居室が空くことによる。(図12)

N 夫妻の所有する書籍は年々増加していたため、この空き部屋を納戸として利用してきた。この空き部屋による stock room に留まらず、現在マンションを別に借りて夫の書齋兼書籍の収納場所としている。

1977年

居住者が最も多かった時期
stock room がない

1984年

N 夫妻の寝室の移動によって居室2が stock room となる

2005年

居住者はN夫妻のみとなり、居室の約半分を stock room が占める

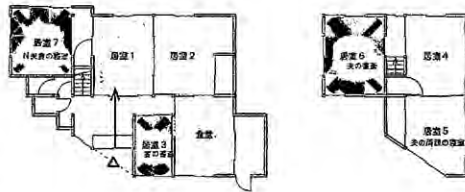
3.2.6 外部からのサポート

浄土寺の長屋の居住者は、子供の育児期間に夫の両親と同居していた時期が人数的に一番多い。介護については、妻が要介護者宅や病院に向くかたちで行われ、浄土寺の長屋で最期を迎えたのは夫の両親だけである。夫の両親は最期まで2階で生活しており、介護期間もそれほど長くはなかった。

子育て・介護に共通して、N夫妻が外部の助けを得ていることが特徴的である。子育てに関しては、初期はN夫妻の学友も目の届くところで長女を遊ばせ、夫の両親と同居するようになってからは彼らによって幼稚園の送り迎えなどが行われていた。介護については、1990年頃からは介護ヘルパーや学生アルバイトが出入りしている。

現在も、家の掃除や書籍の整理のために学生が通っている(図13)。今後も、外部からの出入りやサポートを考慮に入れ、そのようにして訪れる人々が使いやすく、また居心地よく感じる居住環境が求められる。

1990頃



2005

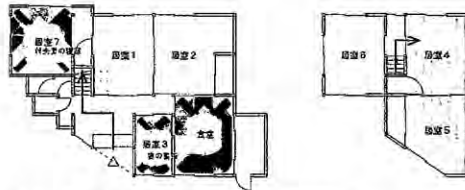
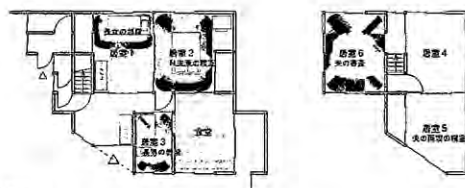
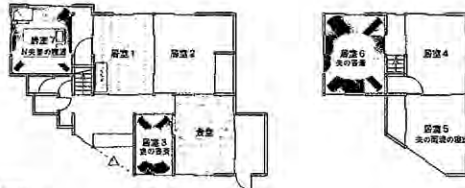


図11 各年代における open common の位置

1977



1984



2005

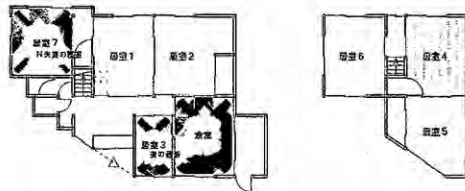
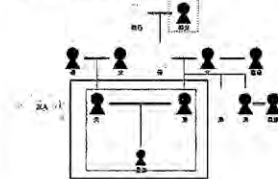
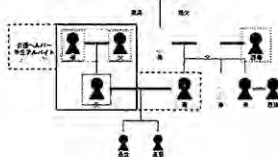


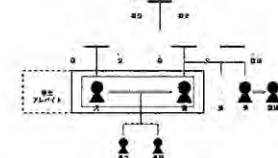
図12 stock room の増加



1963 子育て期間
N夫妻の友人が常にいる状態。
長女の幼稚園の送り迎えなどもやっていた。



1990 介護期間
介護ヘルパーや学生アルバイトに協力を得て、介護にあたる。



2005 今後
介護も含め、外から人を招き入れることが多くなる。

図13 外からのサポート

第4章 浄土寺の長屋増改築計画に

あたっての課題と提案

4.1 課題の整理

第2章、第3章の調査・分析及びヒアリングより、浄土寺の長屋増改築計画にあたっての課題を整理する。それぞれ重複する部分やその他細かなものもあるが、大きく以下の5項目についてまとめる。

- ・書籍の収納スペースの確保
- ・N夫妻の仕事スペースの確保
- ・サポートの受け入れ
- ・防犯・プライバシー
- ・居住環境の向上

4.2 提案

4.2.1 既存改修部分

構造の補強と高齢化への対応に重点を置き、今後10年の使用に耐えうるものとする。

現在は大量の書籍の収納に多くのスペースを使っているが、新築部分にこれらの書籍を移すことで生活スペース・居住環境の充実をはかり、収納等の整理を行う。

食堂と納戸の間の壁を取り払いひとつの大きな空間とすることで、食事空間を充実させる。また、壁面に夫の書斎スペースを設け、仕事をする空間と食事をする空間の両立をはかる(図14)。

□プログラム

食堂・居間/台所/寝室/夫の書斎スペース/客室
/衣・食の収納/将来的な介護空間
/その他生活に必要な水回り 等

4.2.2 新築部分

本棚を構造とする建築物とする。

従来の書庫のように、壁一面に本棚をつくと内部が暗くなってしまふ。N夫妻からの要望より、新築部分には接客空間など人を招き入れる空間が必要である。また、特に妻は光や風が感じられる書斎を望んでいる。

構造となる本棚を建物の中央部に配置してコアをつくり、外皮を軽く仕上げる(図15)。

狭い路地のつきあたりに位置するため、この建物の外観が周辺の住民や環境に与える影響は大きい。外皮を軽い印象に仕上げ、襖のように光が透過する素材を選択することで、周囲に柔らかな印象を与え、『京都』という立地にもなじむ建物とする。

全体の形状は、特有な敷地形状と法的な規制、また光の射し込む方向より導き出した(図16)。

□プログラム

書庫/妻の書斎/接客空間/水回り

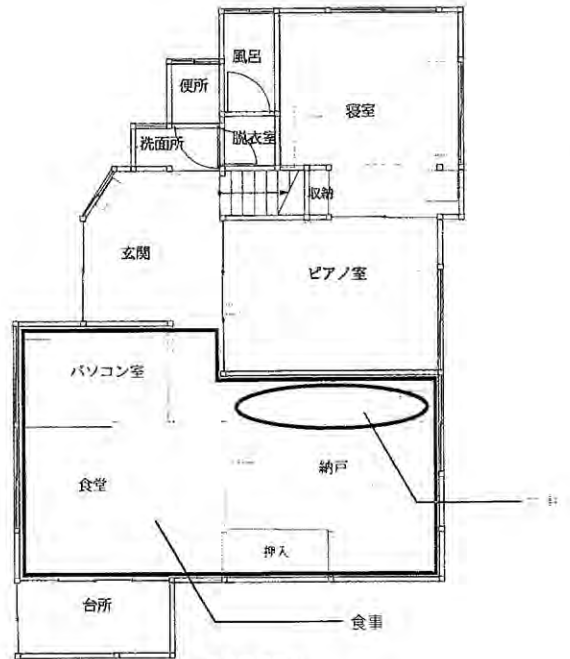


図14 既存改修部分 ダイアグラム

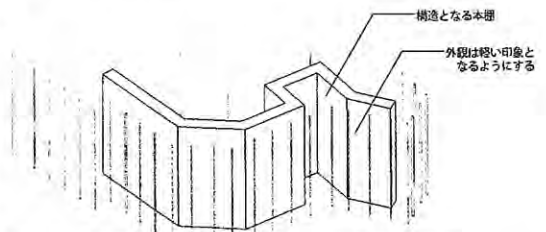


図15 新築部分 構造となる本棚と軽い外壁による構成

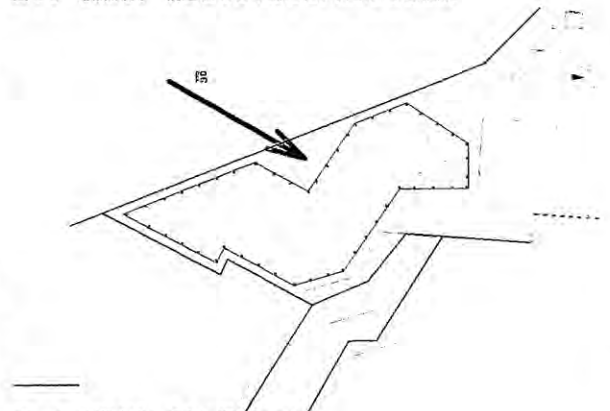


図16 新築部分 全体の形状について

4.2.3 既存改修部分と新築部分の接続

靴を脱がずに既存改修部分と新築部分を行き来できるように接続する。また、郵便物を受け取ったり、近所の人と軽く立ち話ができるような空間とする。

大正時代から建つ既存部分と、新たに建てる建築をどのような形状でつなぐかが課題となる。この部分は光と風の通り道であることを考慮し、それらを遮ることのないように設計する。

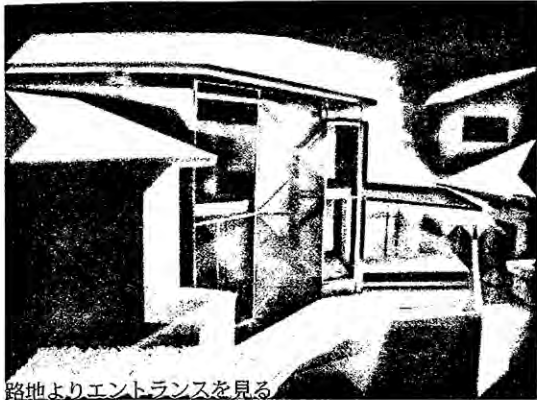
既存部分・新築部分の設計を進めながらスタディしていく。

第5章 打ち合わせの記録

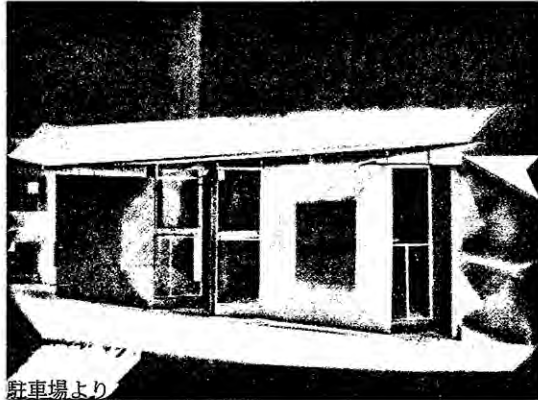
実施設計にいたるまでの幾度とない設計変更の過程を打ち合わせの記録としてまとめた。打ち合わせを重ねる中で、敷地の特性をさらに理解し、N夫妻の求める

ものや今後の可能性について考察を深めながら、最終的に現在の実施設計に至った経緯を振り返る。

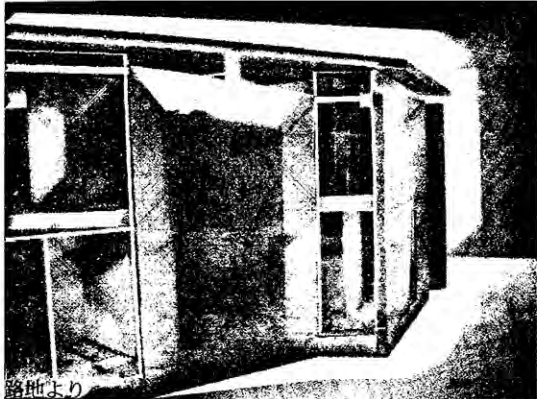
第6章 提案



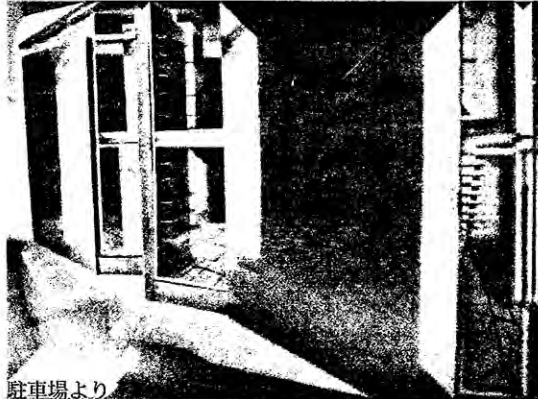
路地よりエントランスを見る



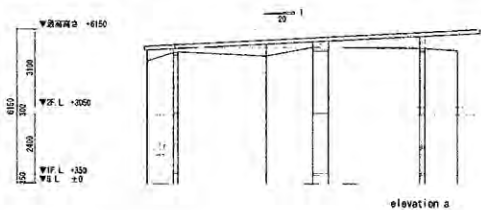
駐車場より



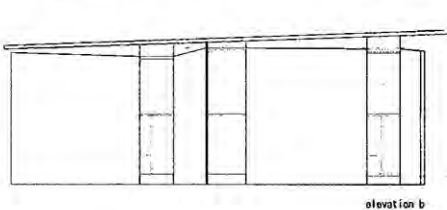
路地より



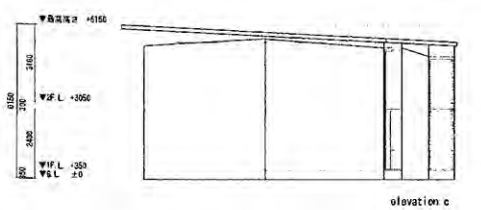
駐車場より



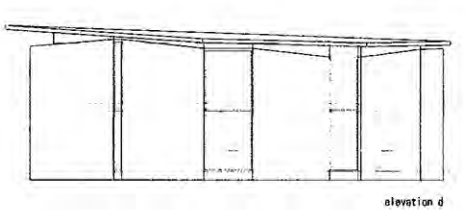
elevation a



elevation b



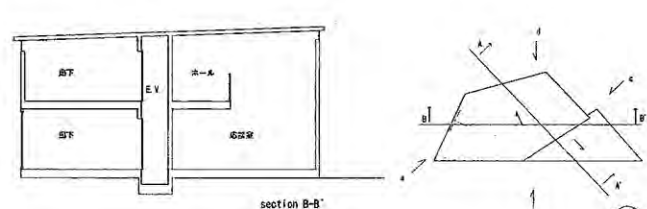
elevation c



elevation d

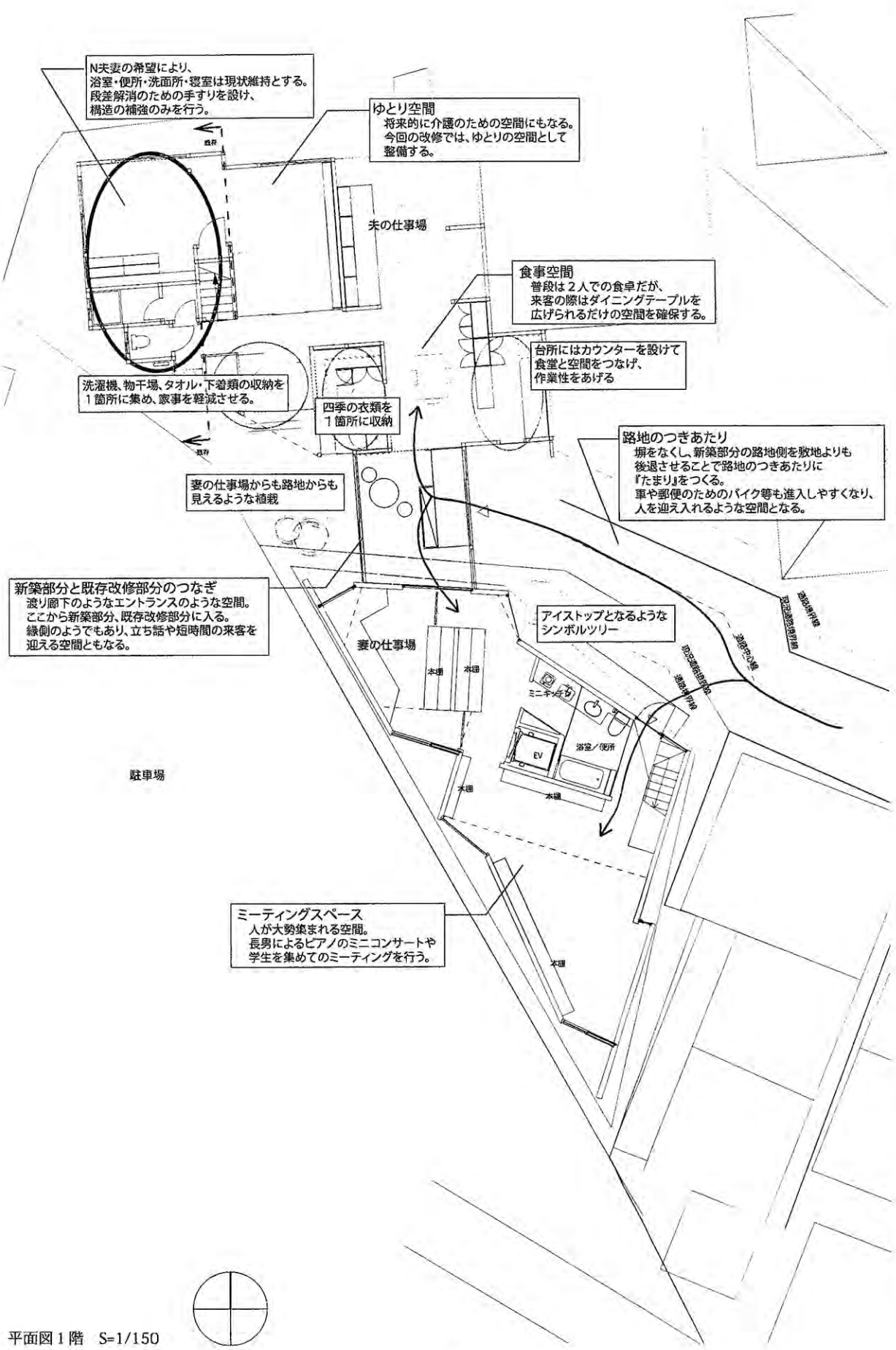


section A-A'



section B-B'

新築部分 立面図・断面図 S=1/300



N夫妻の希望により、浴室・便所・洗面所・寝室は現状維持とする。段差解消のための手すりや設け、構造の補強のみを行う。

ゆとり空間
将来的に介護のための空間にもなる。今回の改修では、ゆとりの空間として整備する。

夫の仕事場

食事空間
普段は2人での食卓だが、来客の際はダイニングテーブルを広げられるだけの空間を確保する。

台所にはカウンターを設けて食堂と空間をつなげ、作業性をあげる

洗濯機、物干場、タオル・下着類の収納を1箇所に集め、家事を軽減させる。

四季の衣類を1箇所に収納

路地のつきあたり
塀をなくし、新築部分の路地側を敷地よりも後退させることで路地のつきあたりに『たまり』をつくる。車や郵便のためのバイク等も進入しやすく、人を迎え入れるような空間となる。

妻の仕事場からも路地からも見えるような植栽

新築部分と既存改修部分のつなぎ
渡り廊下のようなエントランスのような空間。ここから新築部分、既存改修部分に入る。縁側のようなでもあり、立ち話や短時間の来客を迎える空間ともなる。

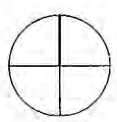
アイストップとなるようなシンボルツリー

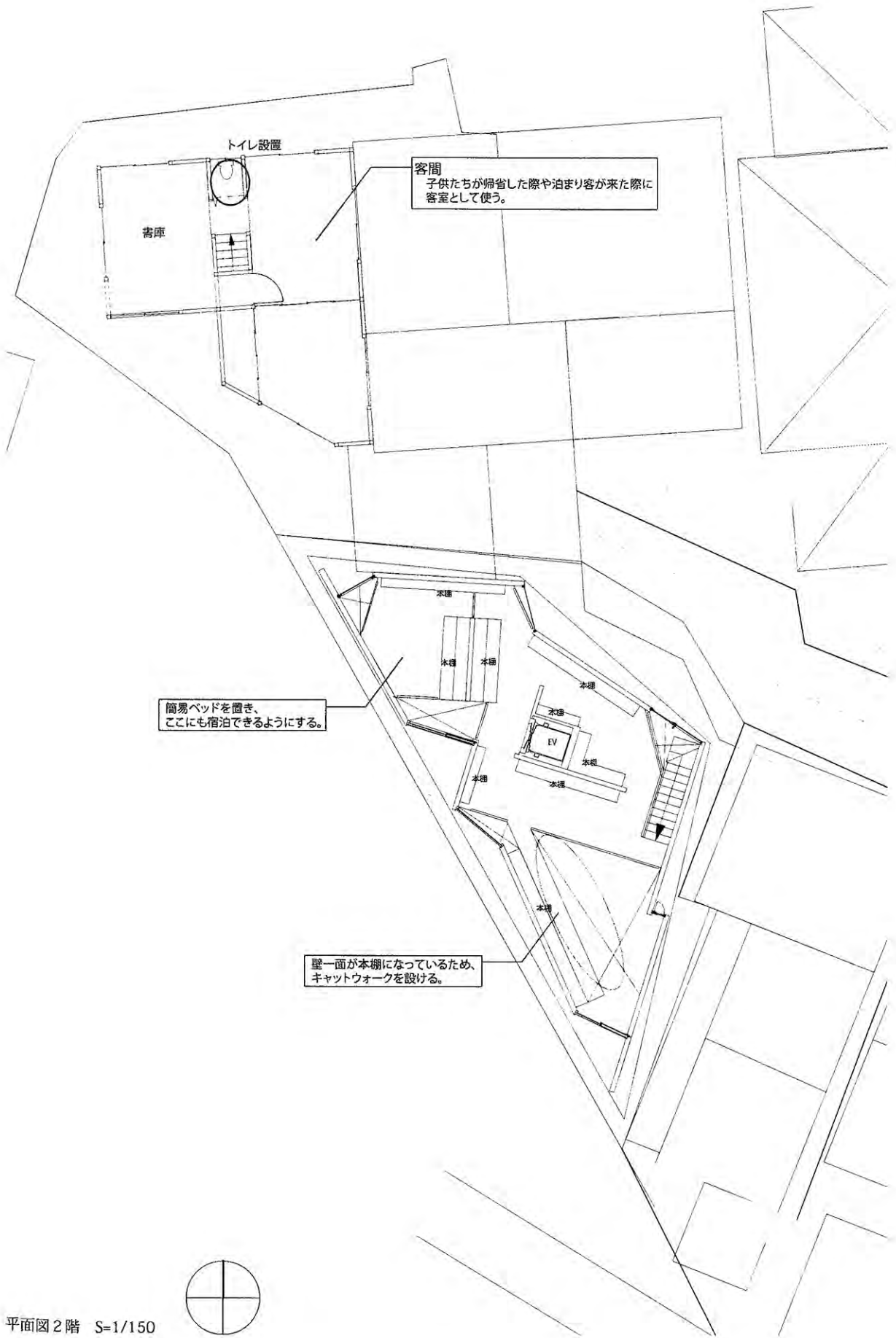
妻の仕事場

駐車場

ミーティングスペース
人が大勢集まれる空間。長男によるピアノのミニコンサートや学生を集めてのミーティングを行う。

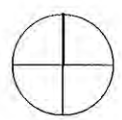
平面図 1階 S=1/150





簡易ベッドを置き、
ここにも宿泊できるようにする。

壁一面が本棚になっているため、
キャットウォークを設ける。



平面図 2階 S=1/150

6.3 おわりに

浄土寺の長屋は、居住者の構成やその状況、また居住はしていないが居住者の生活に関わる人々の変化に伴い、増築されたり各居室の役割が変化したりしてきた。

子どもの誕生と両親との同居期間を過ぎて、居住する人数は減ってきたが、今回の計画では隣地を購入し、大幅に増築する。

居住する人数の増加とともに増改築されてきた浄土寺の長屋は、その人数の減少とともに縮小していくのではなく、さらに拡大するのである。

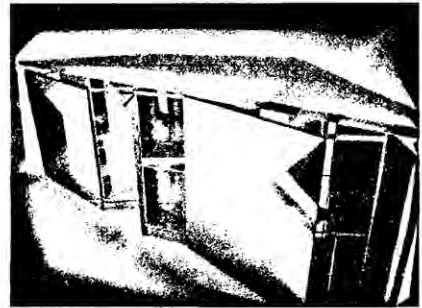
世帯の構成人員の減少、つまり拡大家族の減少と核家族、夫婦世帯、単身者世帯の増加が目立つ現代において、近代までは『家』の中で行われていた行為がそこにおさまりきらなくなってきた。人の自立を支えるためには、従来のように家族の内側で問題の解決を図るというより、都市の多様なサービスを積極的に利用したり、あるいは家族の枠を超えた地域社会やネットワークなどによる相互扶助が、これまで以上に求められている。こうした外部サービスの利用や相互扶助のしくみを生活に取り入れるために必要な空間が、『open common』という開かれた共用空間なのである。

N夫妻がしきりに提示した要望のひとつが、『訪れる人が居心地よく過ごせる空間』であった。今後、サポートを頼むにしろ、客人を招くにしろ、『また来たい』と思われるような住宅が望まれた。それは、『open common』空間に必要な要素のひとつである。

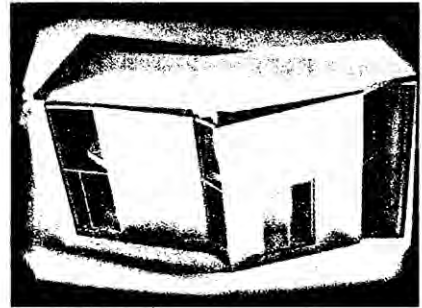
かつては路地や縁側などの空間が『open common』の空間として利用されてきたが、そうした伝統的な『open common』が住宅から失われてきた現代において、また新しい『open common』空間の提案が必要とされている。

今回の計画では、訪問者との関係によって、どの空間に招き入れるかが選択できるようになっている。つまり、『open』の度合いが選択できるのである。また、高齢化を視野にいれ、『生活のサポートのために訪れる人』を想定しながらの設計となった。

修士制作としては実施設計までをまとめることになったが、今後この住宅は建設され、N夫妻によって居住される。この空間が実際にどのように使用されるか、また住まれることによってどのように変化するかを追跡調査し、その変化の中から継続的な居住を実現するために必要な計画とはどのようなものなのかについて、引き続き考察していきたい。



駐車場より



既存住宅より

■参考文献

- ・篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生+ライフスタイル研究会編著/変わる家族と変わる住まい<自在家族>のための住まい論/彰国社/2002
- ・日本女子大学高橋研究室の会 編著/時間の中の住まい 高橋公子と五つの住まいの現在/彰国社/2003
- ・大野秀敏/建築のアイデアをどうまとめていくか? もうひとつのテーマは「都市への戦略」/彰国社/2000
- ・西川祐子/住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋/集英社新書/2004
- ・西川祐子/近代国家と家族モデル/吉川弘文館/2000
- ・西川祐子/者kkと持ち家の文学史「私」のうつわの物語/三省堂/1998
- ・稲津近太郎編/京都市及び接続町村地籍図/京都地籍図編纂所/1912
- ・日本歴史地名大系27 京都市の地名/平凡社/1979
- ・宮澤智士/INAX ALBUM14 日本列島民家入門 民家の見方・楽しみ方/INAX/1993
- ・第一住宅建設協会/city & life no.76 summer 2005 特集『路地・横丁空間からの都市再生』/第一住宅建設協会/2005

■参考資料

- ・総務省 統計局 統計データ <http://www.stat.go.jp/index.htm>
- ・『都市計画図』/京都府立総合資料館より